
●今月のVOICE 2000年10月号

中村伊知哉さん 社団法人音楽制作者連盟顧問・マサチューセッツ工科大学メディアラボ客員教授

郵政省官僚、MIT客員教授というキャリアだけを見れば、なぜ中村伊知哉さんが今年FMPの顧問に就任したのか、不思議に思う方がいるかもしれない。しかし、本誌連載『デジタルパンク通信』での軽妙な筆致やMUSIC CONFERENCEにおけるアイデア溢れるナビゲーターぶりにより、そろそろ中村さんの魅力が浸透し始めた頃ではないだろうか。私たちの新しい仲間をさらに深く知っていただくためにin the city japan 2000の会場でお話を聞いた。

インタビュー／山中 聡(FMP広報担当常務理事)

撮影／鈴木香織

PROFILE

中村伊知哉(なかむら いちや)

1961年生まれ。京都大学在学中、少年ナイフなどともに音楽活動をした後、84年に郵政省入省。95年より郵政大臣官房総務課課長補佐を務める。98年、郵政省を退官し、(株)CSK特別顧問、マサチューセッツ工科大学客員教授に就任。現在はFMP顧問、セガ・オブ・アメリカ研究顧問も務める。著書に『インターネット、自由を我等に』(アスキー出版局刊)など。

<http://www.media.mit.edu/~ichiya/jpn.htm>

京都発“コンテンツ”を巡る略歴

●伊知哉さんは主にMIT(マサチューセッツ工科大学)で研究をされているわけですが、そこに至るまでの道程は直線的じゃないですよ。まずは子供の頃の文化的な目覚めからお聞きます。

「僕は小さい頃はお笑いをやりたいと思っていたですよ。お笑いのテレビ番組を見るのが、とにかく好きだったので。でも、お笑いをやるには、すごく才能がいるんだなということが、中学、高校ぐらいになると分かってくるじゃないですか。それで他に何かできないかなと楽器をやり始めたんです。最初はギターで、ベースもやりました。

僕が育った京都は、1200年以上の伝統に抑圧されている中で、けったいな企業が出てきたり、音楽でもヘンなバンドが出てくる街なんですよ。昨日の(in the cityでの)MUSIC CONFERENCEでもちょっと言いましたけど、ものを表す血の濃いやつがいっぱいたんです。僕らが楽器を弾いていた横で、いつもラッパ吹いて寝っ転がっているおっさんがいて、いいラッパ吹くのにヘンやなあと思っていたら、近藤等則という人だったと後で知ったり。近所でよくライブをやっていたのが、芥川賞を獲った町田町蔵(康)だったり。ローザルクセンブルグのどんとが2年後輩で入ってきて、後でそのどんとと一緒にボ・ガンボスやるKyonが2つ上ぐらいにいたり……京都の界隈で最初にモヒカンになった連中とか、もっとどうしようもないような、シンナーで歯が溶けちゃってポーッとしているようなやつもゴロゴロいました。

夜中にビール瓶を何本か持ってウロウロしているやつがいて「おまえ、何してるの？」と聞いたら、「酒屋に持っていけば1本10円で引き取ってくれるから、それでパン食うねん」とか言ってね。「そんなんでは生きていけへん」と普通は思うんでしょうけど、やつらは翌日ちゃんとパン食って、ギターを磨いて良い音を出したりするわけです。「だって僕、これしかないから」と。それには勝てん。僕はそこまではいけないなと思いましたね。だったら別の道へ行こうと。表現とかコミュニケーションをやりたかったんで、色々考えて郵政省へ行こうと思ったん

です。もちろん公務員試験がありますから、やおら勉強を始めましたけどね」

●郵政省では具体的に何をされていたんですか。

「僕が入ったのは、電々公社を株式会社にして、通信分野を自由化しようという頃でした。つまり通信のインフラをどう整備していくのかという問題が急に立ち上がってきたわけで、その政策を担当したんです。その後、ケーブルテレビや衛星放送の政策作りもやりました。その頃ですよ、最初に奥田(義行FMP理事長)さんにお会いしたのは、これから衛星放送やケーブルテレビが立ち上がってくる時に、音楽がどれだけ大事かみたいなことを熱く語っておられて、当時は“オモロイおっさんやな〜”と思っていましたね(笑)」

●それは80年代後半ですか。

「そうですね。それから郵便局長をやって、93年から95年はパリでウロウロして、戻ってきてからは通信や放送の制度全体を担当するセクションに行って規制緩和をやっていたんですけど、今度はNTTを再編成するという問題が持ち上がって、それが終わったから今度は郵政省自体を再編成する行革に巻き込まれてしまって(笑)。来年から郵政省と自治省と総務庁が合併して総務省になるんですけど、その合併話を決めたところで郵政省は辞めたんです」

●郵政省を辞めてMITに行ったのは、どういった理由からなんですか。

「一つは、このまま役人でいてもコンテンツを一生懸命作っている人たちの役に立てないという焦りみたいなものがずっとあったんですよ。郵政省でも通産省でも文部省でも、クリエイターの人たちを育てていくような仕事をやろうと思えばできるんですけど、結局そこは公務員なので、リスクを冒さないじゃないですか。“こっちもしんどいけど、おまえもがんばれよ”みたいなことが最後までできないので、例えば今のFMPの仲間たちの側から見たらお客さんで終わってしまったと思うんですよね。だから自分のバックにある大きい権力を切ってしまうかかったんです。それとも一つ、日本のクリエイター、アーティストたちは、みんなすごいものを持っているのに、世界にその良い部分が認知されていないじゃないかと思ってまして。どうせだったら自分が海外へ行って、“こんなすごいもん持ってるぞ！ オラオラ”と言ってみかかったんです。英語もできないくせにね(笑)。そう思い続けたところに、MITに子供とメディアの研究センターを作る話が来たんですね。“向こうへ行って何するの？”と聞かれたら、“日本のコンテンツを持って行くんです”と言うのも、まあ、カッコいいかなと思ったんですけど、行ってみたら簡単にはいかなくて。全然思いどおりに進まないんですよ(笑)」

in the cityで見えてきた音楽業界

●そして昨年からFMPの顧問になっていただいて、in the cityでもMUSIC CONFERENCEのナビゲーター(「デジタル・エンターテインメントと音楽」)を務めていただいたわけですけど、伊知哉さんの目から見てin the cityはどう映りましたか。

「大事なものは、このイベントを運動として続けていくエネルギーですよ。続けていくことが一番大変なんですけど、これはやり続けていくべきものなんだと思いました。僕なりに音楽に対する危機感があって、昨日もそういう問題意識をもってナビゲーターをやっていたんですけど、それはこれからも音楽が“音楽”という単独のジャンルで発展していくものなのかどうか、ということです。音楽側がウカウカしていると、他の表現形態に飲み込まれてしまうようなことがあるか

もしれない。気がついたら音楽業界というものはなくて、○○業界にユニットとして組み込まれてしまう可能性もある。僕は音楽という業界が、たとえ産業全体から見たらちっぽけなものだとしても、一つにまとまっておかないといけない、と思っているんです。そうでないと例えばインターネットみたいなものが出てきた時に、いっぺんにワーツと波に吞まれちゃうような気がするんですよ。

ただし、音楽業界の中だけでインターネットやデジタルの話をしてしまうと、自分の持っているコンテンツをどうデリバリーして、その時にどんな風に使われたら困るのかという議論になりがちなのも確かですよ。今の2兆円、3兆円という業界の規模をどう守るのか、それがゼロになってしまう可能性をどうくい止めるかという話だけになっちゃう。僕が考えていたのは、そっちの方向ではなくて、これから生まれてくる10兆円、50兆円のことを考えるには、どんなメンバーで話し合ったらいいのかなということだったんです。だから、ああいった(音楽業界以外の)人たちにもパネラーとして参加してもらって、色々な質問をしてみたんですけどね。それで結局、“みんな何にも分からんね”となってもいい。みんな分からないだったら、それでいいじゃないかという安心感に到達できれば充分ですよ。

でも昨日、一昨日とin the cityに参加している方々を見てると、皆さん顔つきがまともなので、これからも音楽業界は大丈夫かなという気がしてきました。大体ああいうパネル・ディスカッションをやると、7割ぐらいのお客さんは目が死んでいるものなんですけど、かなりの割合で前のめりにストリップを見てるような人がいたので(笑)安心しましたね」

編集者のマネージャーの役割

●一般のコンピュータ・ユーザーと音楽業界の感覚がかけ離れてきてしまう、確かに「これから」のことが見えなくなってしまうよ。

「今の10代以下の連中のインターネットに対する見方は、たぶん音楽業界側とは違っているでしょう。ネットというのはテーブルみたいなもので、色々なものが置いてある。自分もその場所で仲間に入れてもらって、一緒にどこかへ行って遊ぶとか、そんな感覚でしょうから。色々なものが溶け合ってしまう世界なんですよ。だからその時に、やっぱり音楽が面白いと言えるためには、本当の編集者というか、あっちこっちにいいものがあるけど、あなたにはこれが合っていますと選んであげることができる人の存在が大切になってくるでしょう。アーティストが作ったものを情報として編集してあげられる人です。それは単なるディストリビューターとは全然違いますから。たぶん今は、そういう人が足りないんじゃないですかね」

●それはおっしゃるとおりだと思うんですよ。今、伊知哉さんは編集という言葉を使いましたが、僕らマネージャーも同じことができるはずなんですよね。アーティストの音楽性を自分なりに判断して、だったらこういう人に聞かせたらいんだということは編集に近いわけですから。

「そう、そのことを言っているんです。リスナーはこういうことを求めているんだということを知り取って、自分の周りにいる表現者にちゃんと伝えて、作品を発信してあげられる人です。それはネットではなくて、人の役割ですからね」

●アメリカでは、編集的なスタンスのビジネスは目立ってきてるんですか。

「個人で目立ってきている人というのは、僕もまだ知りません。ただ、インターネット上でみんなの御用聞きをして回って、必要なサイトにつないであげる“エージェント”というソフトが出てきてるんですけど、それがその現れなのかもしれませんね。個人や会社がネット上の編集機能をビジネスしていくまでには、まだ

ちょっと時間がかかるでしょう。だからそれ以前に、世の中で色々な仕事をしている人の中でも、ものをクリエイイトする人と編集をする人は偉いんだということをつからせたいと思ってんです。銀行に勤めているより、ずっとお金持ちになれるよという風に、世の中のヒエラルキーとか価値観に石ぶつかけたい。もともとコンテンツに関することをやりたいと思ったのは、それですから」

●伊知哉さん自身の今後の夢はどんなことですか。

「今はものを作る人たちが活動をするための環境を作ったり、社会や技術を組み立てていくという側にはいるんですけど、それをずっとやっていくと、たぶんどこかで“自分でも何か作りたいな”という気になると思うんです。その時は、自分で作ったものを世の中にぶつけてみたいですね」

●今も自分のホームページで表現しているじゃないですか。

「今はまだ、カッコつけてるからダメなんですよ。もっとめちやくちやくだらないことをやりたいんです。“役所辞めてアメリカまで行ったくせに、何やってんねん”と言われたいんです(笑)」

BACK TRACK 言葉の背景

中村さんがナビゲーターを務めたMUSIC CONFERENCEは、in the cityに新しい風を運んだ。それはパネラー陣に○×方式の質問を次々に浴びせるという“演出”もさることながら、中村さんの「おもしろいこと好き」の資質による部分が大きいのではないだろうか。現在、MITで進めている研究もカタ苦しいものではなく、デジタルの明るい未来を予感させてくれるもののようなのだ。

「ひと言で言えば、子供が何かを表現するための環境作りをしているんです。ゲームやおもちゃ、ダンスなど色々ツールはあるんですけど、僕がやっている研究では音楽が非常に重要な位置を占めているんです。今、やっているのは楽器作りですね。デジタルを使えば、これまでと全然違うコンセプトの楽器が生まれてくるはずだし、子供が特別な訓練をしなくても、演奏ができて音楽を自分で作り出せる、そういうものができてくるでしょう。インターネットで世界中の子供をつなげて、同時に演奏をさせるとか、曲を作らせるとか。そのための環境作りを最近、始めたところです。

今まで僕たちは言葉や文字でコミュニケーションをしていましたけど、これからは音や映像で自分を表現する機会が間違いなく増えてきます。アメリカでも最近の教育の分野を見てると、数学という論理と言葉のコミュニケーションがあって、もう一つの柱がアートになっているんです。日本だと英数国社理みたいなのがまずあって、音楽とか図画工作はちょっと脇にありますけど、今後はそこに光を当てていくべきじゃないかなと個人的には思っているんです」

今月のTRACK DOWN

おもしろい人、頭のいい人、壊れちゃってる人。

この業界に入って最初に思ったのは、自分が普通すぎるという事。

20年経った今、最近知り会う機会の減ったそういった方に会えた。中村さんの語られた編集者は、僕の中では次の業界を担うスーパーマネージャー。個人の力量の問われる今こそ、正しい情報と個人的な夢溢れた発想、そして愛情いっぱい編集者的スーパーマネージャーを目指そう!! (山中 聡)